

宮沢賢治

セロ弾きのゴーシュ



セロ弾きのゴージユ

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲の練習をしていました。

トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いろ風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシユも口をりんと結んで眼を皿のようにして楽譜を見つめながらも一心に弾いています。

にわかにはたつと楽長が両手を鳴らしました。みんなぴたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりまじた。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシユは顔をまっ赤にして額に汗を出しながらやっといま云われたところを通りました。ほっと安心しながら、

つづけて弾いていますと楽長がまた手をぱつと拍うちました。

「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞき込んだりじぶんの楽器をはじめ見ていたりしています。ゴーシユはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシユも悪いのですがセロもずいぶん悪いのでした。

「今の前の小節から。はいっ。」
みんなはまたはじめました。ゴーシユも口をまげて一

生けん命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思っていると楽長がおどすような形をしてまたぱたつと手を拍ちました。またかとゴーシユはどきつとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。ゴーシユはそこでさつきじぶんのとときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思つて弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんと踏んでどなり出しました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっっているぼくらがあの金沓鍛冶かなぐつかだの砂糖屋の丁稚でっちなんかの寄り集りに負けてしまったらいったいわれわれの面目はどうなるんだ。おいゴーシユ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもびたつと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずってみんなのあとをついてあるくよ

うなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝
あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるよう
なことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では
今日は練習はここまで、休んで六時にはかっきりボツク
スへ入ってくれ給え。」

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマ
ツチをすったりどこかへ出て行ったりしました。ゴーシ
ユはその粗末な箱みたいなセロをかかえて壁の方へ向い
て口をまげてぼろぼろなみだ涙をこぼしましたが、気を取り
直してじぶんだけたったひとりいまやったところをはじ

めからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅くゴーシユは何か巨おおきな黒いものをしよつてじぶんの家へ帰ってきました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシユはそこにたった一人ですんでいて午前は小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をきったり甘藍キャベジの虫をひろったりしてひるすぎになるといつも出て行っていたのです。ゴーシユがうちへ入ってあかりをつけるときさっきの黒い包みをあけました。それは何でもない。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシユはそれを床の上にそつと置くと、

いきなり棚からコップをとってバケツの水をごくごくのみました。

それから頭を一つふって椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えでは弾き一生けん命しまいまで行く。とまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼もまるで血走ってとても物凄い顔つきになりいまにも倒れる

かと思うように見えました。

そのとき誰たれかうしろの扉とをとんとんと叩くものがありました。

「ホーシユ君か。」ゴーシユはねぼけたように叫びました。ところがすうと扉を押してはいつて来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫でした。

ゴーシユの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシユの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬はひどいやな。」

「何だと」ゴーシユがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシュはひるからのむしやくしやを一ぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもってきたものなど食うか。それからそのトマトだっておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしって。いままでもトマトの茎をかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行ってしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩をまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらって云いました。

「先生、そうお怒りになっっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」
セロ弾きはしやくにさわってこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。

「いやご遠慮はありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシユはすっかりまっ赤になってひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかにかきを替えて云いました。

「では弾くよ。」

ゴーシユは何と思つたか扉にかぎをかつて窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室へやのなかへ半分ほどはいつてきました。

「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭^ふいて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思ったかまずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。それからまるで嵐のような勢で「インド印度の虎狩」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチツと眼をしたかと思うとぱつと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだを

ぶっつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からぱちぱち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがってしばらくくくしやみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにはせあるきだしました。ゴーシユはすっかり面白くなってますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてください。これからも先生のタクトなんかと

りませんから。」

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがってはねあがってまわったり壁にからだをくつつけたりしましたが壁についたあとにはしばらく青くひかるのでした。しまいは猫はまるで風車のようぐるぐるぐるぐるゴーシユをまわりました。

ゴーシユもすこしぐるぐるして来ましたので、

「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。

すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐつとしやくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマツチを一本とって

「どうだい。工合をわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖^{とが}った長い舌をベロリと出しました。

「ははあ、少し荒れたね。」セロ弾きは云いながらいき

なりマツチを舌でシュツとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫は愕おどろいたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口の扉へ行って頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた戻って来てどんとぶつつかつてはよろよろまた戻って来てまたぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとなりました。

ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱かやのなかを走って行くのを見てちよつとわらいました。それから、やつ

とせいせいしたというようにぐっすりねむりました。

次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時之間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますと誰か屋根裏をこっこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと

音がして一疋ひきの灰いろの鳥が降りて来ました。床へとま
ったのを見るとそれはかつこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシユが云いまし
た。

「音楽を教わりたいのです。」

かつこう鳥はすまして云いました。

ゴーシユは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かつこう、かつこうという
だけじゃあないか。」

するとかつこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼^なくのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこ
うなくのとかつこうとこうなくのとでは聞いていてもよ
ほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかま
ならかつこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれの処へ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」
「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾いてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

ゴーシユはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかつこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなんでないんです。」
「うるさいなあ。ではおまえやってごらん。」

「こうですよ。」 かつこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かつこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六交響楽も同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どうちがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かっこうかっこうかっこうかっこうかっこうとつづけてひきました。

するとかっこうはたいへんよろこんで途中からかっこうかっこうかっこうかっこうとついて叫びました。それももう一生けん命からだをまげていつまでも叫ぶので

す。

ゴーシュはどうとう手が痛くなつて

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめま
した。するとかっこうは残念そうに眼をつりあげてまだ
しばらくないていました。がやつと

「……かっこうかっこうかっこうかっこうか」と云つてや
めました。

ゴーシュがすっかりおこつてしまつて、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいい

ようだけれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わってるんではないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたったもう一ぺんおねがいです。どうか。」かっこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれつきりだよ。」

ゴーシユは弓をかまえました。かっこうは「くっ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」と喋ってまた一つおじぎをしました。

「いやになっちまうなあ。」ゴーシユはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかっこうはまたまるで本気になって「かっこうかっこうかっこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシユははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふっと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかっこうの方がいいような気がするのでした。

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になってし

まうんじやないか。」とゴーシユはいきなりぴたりとセ
口をやめました。

するとかっこうはどしんと頭を叩かれたようにふらふ
らっとしてそれからまたさっきのように

「かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっかっ」と
云ってやめました。それから恨めしそうにゴーシユを見
て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないや
つでものどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云い
ました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか。」
ゴーシユは窓を指さしました。

東のそらがぼうつと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北の方へどんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちよつとですから。」

かつこうはまた頭を下げました。

「黙れっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしって朝飯に食ってしまおうぞ。」
ゴーシユはどんと

床をふみました。

するとかっこうはにわかにはびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子ガラスにはげしく頭をぶつつけてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立て窓をあけようとしてしまいましたが元来この窓はそんなにいつでもするする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかっこうがばつとぶつつかって下へ落ちました。見るとくちばし嘴のつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っているら。」ゴーシュが
やっとなんばかり窓をあけたとき、かっこうは起きあが
って何が何でもこんどこそというようにじつと窓の向う
の東のそらを見つめて、あらん限りの力をこめた風では
っとなんばたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝
子につきあたってかっこうは下へ落ちたまましばらく身
動きもしませんでした。つかまえてドアから飛ばしてや
ろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかっこうは
眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛び
つきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓

をばつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなっていました。ゴーシュはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室へやのすみへころがって睡ねってしまいました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾ひいてつかれて水を一杯のんでいますと、また扉とをこつこつ叩くものがあります。

今夜は何が来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかして追い払ってやろうと思つてコツプをもつたまま待ち構えて居りますと、扉がすこしあいて一疋の狸ひきの子がはいつてきました。ゴーシユはそこでその扉をも少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、

「こら、狸、おまえは狸汁ということを知っているかっ。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座つたままどうもわからないというように首をまげて考えていました。しばらくたつて「狸汁ってぼく知らない。」と云いました。ゴーシユは

その顔を見て思わず吹き出そうとしましたが、まだ無理に恐い顔をして、

「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくたくたと煮ておれさまの食うようにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってぼくのお父さんがね、ゴーシユさんはとてもいい人でこわくないから行って習えと云ったよ。」と云いました。そこでゴーシユもとうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡にわかいだよ。」

狸の子は俄にわかに勢がついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓の係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出ししました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快的な馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜だよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシユは手にとってわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシユは狸の子がどうするのかと思つてちらちらそつちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもつてセロの駒の下のところを拍子をとってぽんぽん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾いているうちにゴーシユはこれは面白いぞ

と思いました。

おしまいまでひいてしまおうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやっと思えついたというように云いました。

「ゴーシユさんはこの二番目の糸をひくときはききたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまずくようになるよ。」

ゴーシユははっとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたってからでないと言が出ないような気がゆうべからしていたのでした。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」

とゴーシユはかなしそうに云いました。すると狸は氣の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシユははじめました。狸の子はさっきのようにとんとん叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしよってゴムテープ

ではちんととめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡って元気をとり戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうとしていますとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴー

シユはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシユの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらいしかないのでゴーシユはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわれたらうというようにきよろきよろしながらゴーシユの前に来て、青い栗の実を一つぶ前においてちやんとおじぎをして云いました。

「先生、この兎があんばいがわるくて死にそうでござい

ますが先生お慈悲になおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシユはすこしむつとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまっっていましたでしたがまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎さんのおばあさんもな

おりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったことはないからな。もつとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行ったがね。ははん。」ゴーシユは呆れてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野鼠のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの兎はどうせ病気になるならもっと早くなればよかった。さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になるといっしょにぴたっと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてください。」「ならないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」「

ゴーシュはびっくりして叫びました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」「

野ねずみは眼を片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここらのものは病気になるとみんな先生のおう

ちの床下にはいって療すのでございます。なお」

「すると療るのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐ療る方もあればうちへ帰ってから療る方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病気がなおるというのか。よし。わかったよ。やってやろう。」ゴージユはちよつとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔あなから中へ入れてしま

いました。

「わたしもいつしよについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おっかさんの野ねずみはきちがいのようになつてセロに飛びつきました。

「おまえさんもはいるかね。」セロ弾きはおっかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたばたしながら中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるよう

に足をそろえてうまく落ちたかい。」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊の
ような小さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫さ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシ
ユはおっかさんのねずみを下におろしてそれから弓をと
って何とかラプソディとかいうものをごうごうがあがあ
弾きました。するとおっかさんのねずみはいかにも心配
そうにその音の工合をきいていました。がとうとうこらえ
切れなくなつたふうで

「もう沢山です。どうか出してやっってください。」と云

いました。

「なあんだ、これでいいのか。」ゴーシユはセロをまげて孔のところに手をあてて待っていましたたら間もなくこどものねずみが出てきました。ゴーシユは、だまってそれをおろしてやりました。見るとすっかり目をつぶってぶるぶるぶるぶるふるえていました。

「どうだったの。いいかい。気分は。」

こどものねずみはすこしもへんじもしないでまだしばらく眼をつぶったままぶるぶるふるふるふるえていました。たがにわかにかきあがって走りだした。

「ああよくなつたんだ。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。おつかさんのねずみもいっしょに走っていましたが、まもなくゴーシユの前に来てしきりにおじぎをしながら

「ありがとうございますありますありがとうございます」と十ばかり云いました。

ゴーシユは何がなかあいそうになつて

「おい、おまえたちはパンはたべるのか。」とききました。

すると野鼠はびっくりしたようにきよろきよろあたり

を見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふく膨ふくらんでいておいしいものなそうでございますが、そうでなくても私どもはおうちの戸棚へなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びになんど参れましょう。」と云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちよつと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシユはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしって野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「あああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシユはねどこへどっかかり倒れてすぐぐうぐうねむってしまいました。

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏にある控室へみんなぱつと顔をほ

てらしてめいめい楽器をもって、ぞろぞろホールの舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の音がまだ嵐のように鳴って居ります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうでもいいというようにそのそみんなの間を歩きまわっていましたが、じつはどうして嬉しさでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマッチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだぱちぱち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなって何だかこわいような

手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいつて来ました。

「アンコールをやっていますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなって答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようには行くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸挨拶してください。」

「だめだ。おい、ゴーシユ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシユは呆氣あっけにとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシユに持たせて扉とをあけるといきなり舞台へゴーシユを押し出してしまいました。ゴーシユがその孔のあいたセロをもつてじつに困ってしまったって舞台へ出るとみんなはそら見ろというように一そうひどく手を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度インド

の虎狩をひいてやるから。」ゴーシユはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のような勢で虎狩りを弾きました。ところが聴衆はしいんとなつて一生けん命聞いています。ゴーシユはどんどん弾きました。猫が切ながつてぱちぱち火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシユはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のようにすばやくセロをもって楽屋へ遁に

げ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあったあとのように眼をじっとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシユはやぶれかぶれだと思ってみんなの間をさっさとあるいて行って向うの長椅子へどっかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこっちへ向けてゴーシユを見ましたがやはりまじめでべつにわらっているようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴーシユは思いました。ところが楽長は立って云いました。

「ゴーシユ君、よかったぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本気になって聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」

仲間もみんな立って来て「よかったぜ」とゴーシユに云いました。

「いや、からだだが丈夫だからこんなこともできるよ。普

通の人なら死んでしまうからな。」樂長が向うで云って
いました。

その晩遅くゴーシユは自分のうちへ帰って来ました。

そしてまた水をがぶがぶ呑みました。それから窓をあ
けていつかかっこうの飛んで行つたと思つた遠くのそら
をながめながら

「ああかっこう。あときはすまなかつたなあ。おれは
怒つたんじやなかつたんだ。」と云いました。

日本文学電子図書館

ゼロ弾きのゴーシュ

著 者：宮沢賢治

制作者：宮澤一郎

底 本：「昭和文学全集 4」
小学館

平成元年4月1日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館